

教科書と「原爆文学」

——林京子「空罐」を中心に

中野和典

一 はじめに——教科書と林京子「空罐」

小・中・高等学校の教科書は特別な読みものである。文部(科学)省による検定制度があつて掲載される内容や記述の仕方に一定の規制がかけられている。一般の書店で誰もが気軽に買えるものではなく、児童・生徒は学校が採択したものを読まされる。もちろん、こうした制度によって教育の質や内容の平等さが保たれているのだが、教科書は博物館や記念碑や追悼記念行事などとともに集団の記憶を形成するものになつてもいる^①。この傾向はよく議論の対象になる歴史教科書に顕著だが、国語教科書も無縁ではない。川口隆行は(一九七三年に「黒い雨」(東京書籍、筑摩書房)、次いで一九七五年に「夏の花」(三省堂)と、高等学校国語教科書に採録された時期がほぼ一致すること)に注目して(教科書という公的メディア、公教育制度への原爆文学の登録は、この時期にトラウマ記憶から物語記憶への変換、ある種の社会的合意形成が行われたことを示唆しよう)と指摘している^②。この指摘

は、これも川口の言う通り(そもそも、トラウマとは、そこにあるとたやすく名指せるものではない)ため実証するのは難しいが、国語教科書も歴史教科書と同じように集団の記憶を反映し、それを形成する側面を持つていることの分析として示唆に富むものと言えよう。そこに見られる集団的な記憶とは(「黒い雨」が「庶民」の戦争への怒りを代弁したと評価され、無垢な戦争被害者と自覚した自己表象を生産する契機として機能した)ことが示す通り、(加害者としての過去)を忘れて(無垢な戦争被害者)といった自己表象)を記憶しようとするものであり、(戦争被害者)と言つても爆弾という(トラウマ的体験を克服しようとするゆえに、それを強迫的に反復してしまう)かのような「怒れる大田洋子」という像を忘れて(品の良い純朴な淑女として、感傷的な感情移入の一方的対象として受容されかねない)性質を持つ「原爆乙女」の矢須子)という像を記憶しようとするものであると川口は論じている。そのような(ナショナルな欲望)が国語教科書における「原爆文学」の扱われ方にも見て取れるということである。

一九七〇年代に国語教科書に掲載されるようになった「原爆文学」は、これも川口が指摘する通り、その後〈定番教材であった「夏の花」「黒い雨」の採録率は、減少〉し、〈「黒い雨」は高等学校の教科書からは姿を消し、中学校で一社（学校図書）が採用するだけで、峠三吉の詩も退場した〉が⁵³、代わりに採録数が増えているのが林京子の作品である⁵⁴。林の作品が国語教科書に掲載されたのは一九八一年度の「友よ」（教育出版「中学国語2」）が最初であり、次いで一九八二年度には「ギヤマン ビードロ」（第一学習社「高等学校国語1」）、一九九四年度には「祭りの場」（角川書店「高等学校国語1」）が掲載されるようになったが、近年増えているのが一九九四年度から掲載されるようになった「空罐」であり⁵⁵、現在は五種類の教科書に掲載されている⁵⁶。林京子「空罐」は一九七七年三月に「群像」に発表され⁵⁷、翌年五月には連作短編集『ギヤマン ビードロ』の冒頭に収められた⁵⁸。同誌に同年一月に発表された「友よ」も『ギヤマン ビードロ』の九番目に収められている。元「群像」副編集長の橋中雄二によれば、この連作は〈連載中からも好評だったが、出版されてからも評判高く、その年の文部大臣芸術選奨授賞の内示があった〉が、林京子は〈被爆者としては国からの榮譽を受けるわけにはいかない〉という理由で〈この内示を辞退した〉のだという⁵⁹。その後、橋中が〈講談社文芸文庫の創刊（※一九八八年——中野注）に関わって九年、定年退職した前後〉の頃、〈世の中は、どう見ても保守反動化しつつ〉あり、〈林京子の作品も教科書から敬遠されつつあった〉ときに〈芸術選奨は、これこそ文部大臣のお墨付きだから、黄門様の印籠のようなものだから、貰って置いたほうが良か

ったか〉という（ブラック・ユーモア）を記した葉書を林から受け取ったともいう。

林は教科書に自分の作品が掲載されたことを喜んでいたらしく、一九八一年に発表したエッセイには次のように書いている⁶⁰。

最近私の書いたものが載った本と、お金を母に送った。本は、中学二年生の教科書で、「友よ」が掲載され、教科書に載ったのだから、と喜んでくれると思っていた。そしたら、折り返しの電話で、お金のお札だけを言って、電話を切ってしまった。

「友よ」が掲載された教科書を母親が〈喜んでくれると思つて〉送っていることから林自身もそれを喜んでいたことが窺⁶¹える。

このように林が自作の教科書への掲載を喜んだのは、それによって自分が被爆した年齢（一四歳）に近い生徒たちに自作が多く読まれるようになることが大きな理由であったと推測できる。林は一九八九年に発表したエッセイに次のように書いている⁶²。

ある中学校の二年生たちから、便りをもらった。なかに五十人ばかりの、感想文が入っていた。中学二年生の国語の教科書に載っている「友よ」の感想文である。原稿用紙二、三枚に書いた文章で、私の短篇に対し生徒たちは冷静に、あるいは興奮気味に八月九日を受け止め、原子爆弾を落としたことに「頭にきた」、と現代つ子らしい言葉で書いている生徒もいる。詩を送ってくれた生徒もいる。一人の生徒は「もう戦争はしないでくれ」と書いている。「友よ」の主人公「中田」のその後を気遣って、消息を訊ねた感想文もある。

「中田」さんはお花屋さんをしています、美しい花に囲まれて幸福に生きています、と私は返事を書いた。少年や少女

たちは安心するだろう。

送られてきた（五十人ばかり）の中学二年生の感想文の一つ一つを読み、返事まで書いていることから、教科書への掲載によって自作が多く（少年や少女たち）に読まれ、若い読者との新しい交流が生まれるようになったことを林が喜んでいたことが分かる。自作が芸術選奨を受けることは辞退する一方で、教科書に掲載されることは喜ぶという矛盾しているようにも見えるこの反応からは、被爆者としての思いと作家としての思いが交錯する林の心境の複雑さが読み取れる。

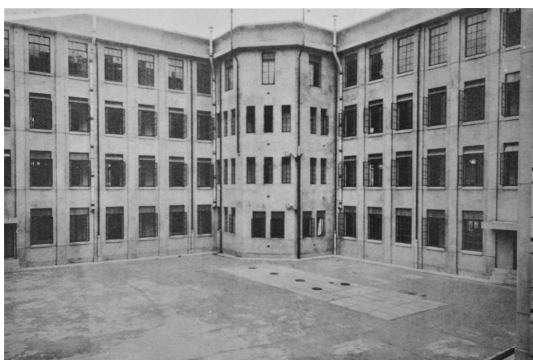
このような林個人の思いとは別の次元で、芸術選奨の内示と教科書への掲載という出来事は林京子作品の受容をめぐる状況の変化を示している。野坂昭雄は（林が芥川賞作家として一定の評価を得て、長崎の原爆をテーマに作品を発表し始める一九七〇年代半ばは、中上の批判も含めた原爆文学に関する論争や批評を通して、このジャンルが文壇に組み込まれ、馴致されていくプロセスの一部だと言えるだろう）と指摘しているが⁽¹²⁾、一九八〇年代に林京子作品が（たとえ林が辞退しても）芸術選奨の内示を受け、教科書に掲載されるようになったことには「原爆文学」の正典化と馴致がさらに進み、林京子作品もその状況に取り込まれ、それを補強するものとして位置づけられるようになったことが現れていると見ることもできる。

現在、井伏鱒二「黒い雨」と原民喜「夏の花」はそれぞれ一種類の教科書に掲載されるだけになり⁽¹³⁾、林京子の「空罐」は五種類、「友よ」は二種類の教科書に掲載されるようになって⁽¹⁴⁾いる。この状況をどのように考えればよいのか。長崎高等女学校をモデル

ルとする（N高女）の生徒たちの被爆体験を描いた林京子作品が国語の「定番教材」になっていることを、川口隆行が指摘する通り（品の良い純朴な淑女）という「原爆乙女」の像や（無垢な戦争被害者）という自己表象を記憶することによって戦争の（加害者としての過去を忘却する）という（ナショナルな欲望）を満たそうとする力が働きつづけていることの現れと見ることはできる。しかし文学テキストには単にイデオロギーを補強するだけでなく、それを相対化し、問題化する力もあるのではないか。本論では現時点で教科書への掲載数が最も多い「空罐」に注目してその可能性を探りたい。本来なら先に教科書に掲載された「友よ」や「祭りの場」などとの比較も行うべきであるが、それについては稿を改めることにして、本論では「空罐」についての文学研究と教材研究の両方を検討した上で小説に描かれるものごとにあらかじめ注釈を加え、さらに「場所」という視点を導入することによって新たな解釈を試みる。それによって「空罐」の（ナショナルな欲望）には回収されない側面を追究したい。

二 中庭——「共有できる記憶」を浮かび上がらせる場所

「空罐」が一九九四年にはじめて教科書に掲載されてから四半世紀の間に多くの指導資料が書かれてきた⁽¹⁵⁾。高木信は教科書の指導資料について（大切なことについては多くを語らない）代わりに（どうでもいいことについては饒舌なまでに語り尽くす）とし、（空缶）で顕著であったのは、「他の林京子作品では、こう書かれている」式の解説である」と批判している。その具体例とし



中庭(写真帳『新築記念県立長崎高等女学校』1930・11)

してそれに終始しているわけではなく、他作品に結びつけるのが小説を解釈するのに役立たない(どうでもいいこと)ばかりであるとも言えない。林京子は『やすらかに今はねむり給え』⁽¹⁷⁾の自作解説で作中の人名について次のように語っている⁽¹⁸⁾。

当時は口を閉ざしていた友人たちも、ぼつぼつと工場時代のこと、九日のこと、原爆症の話、不安、そして差別、結婚出産など、話してくれるようになりました。どれも、九日を避けては通れないことばかりです。(略)昭和二十年五月二十五日からじまった動員の生活日記と話は、私の同学年生だった山口美代子さんと、吉永正子さんから頂戴したものです。

て(Ｔ先生が誰であったかについて、『祭りの場』(講談社 一九七五年)、

『道』(文藝春秋 一九八五年)から、『立花珠枝先生』だとしているが、その情報がいっただい何の役に立つのだろうか)と疑問を呈している⁽¹⁹⁾。確かに「空罐」に描かれている事物を林京子の他作品に描かれている事物に結びつけるだけでは小説の読解として不十分と言わざるを得ないが、指導資料は決

(略)今日まで、八月九日に関する作中人物の固有の名は伏せてきましたが、「やすらかに……」に関しては、確かなものとして書いていたいと思います。皆さまの了承を得て、お名前を掲げさせて頂きました。また、亡くなられた三人の先生は長崎県立長崎高等女学校の、立花玉枝先生(作中、南先生)角田京子先生(無田先生)蒲池悦子先生(経堂先生)となります。

松本常彦が林の小説において(登場人物が本名で記されることはない)理由を(被爆差別への配慮が大きかったと考えられる)と指摘する通り、原爆の問題は(八月九日)で終わらず、その後も(原爆症)や(結婚出産など)において(不安)や(差別)をもたらすものであるため、林は(八月九日)に関する作中人物の固有の名は伏せて、別の名前やイニシャルを使ってきたのである。

「空罐」において立花先生がＴ先生と表記されているのは読解に役立たない(どうでもいいこと)のではなく、むしろ被爆者とその関係者に配慮する必要からそう書かざるをえなかったことの結果なのであり、原爆がいかに長い時間にわたって人間の生活に深刻な影響を与えつづけるかを示す痕跡なのである。「空罐」に限らず小説の細部にまで注釈をつけて一つ一つの言葉や事物について知るのには解釈を充実させるために有益なことである。

「空罐」は原爆投下から(三十年)後の(初冬)、元(Ｎ高女生)の「私」たち(五人)が(来年一杯で廃校になってしまおう)という(校舎)を尋ねたときのことを描いた小説である。この(校舎)のモデルは林京子が被爆したときに所属していた長崎高等女学校の一九三〇年に竣工した鉄筋コンクリート四階建の校舎で

あり、一九四八年からは長崎東高等学校の校舎として引き継がれ、一九七六年に東高が立山校舎に移転するまで使われていたものである。この校舎が解体される前に林は友人たちと実際にそこを訪れており、そのときのことと連作短篇集『ギヤマン ビードロ』との関係について次のように振り返っている⁽³⁰⁾。

連作にかかる前に、私は十二、三の芯になる話を書き出していた。長編の流れのなかに埋めてしまいたくない、私には大切な事柄だった。それらの、独立した小さな話を書き継いで、モザイク模様の全体像が浮き上がってくれたら、という思いがあった。

冒頭の「空罐」は、予定していた話のなかの、一つである。舞台になった母校は、十三年ほど前に取り壊されてしまった。交通渋滞の原因になっている、ということが取り壊しの理由らしかった。時の流れを知らされる話だったが、八月九日、動員先の兵器工場からまっすぐ帰っていったのが、この校舎だった。戦後、はじめての始業式が行われたのも、被爆死した生徒と先生たちの追悼式が行われたのも、満身創痍のこの校舎だった。

私は取り壊される前に、母校を記憶に刻んでおきたかった。数人の友人たちと、空家になった母校を訪ねた。そのときの語らいが「空罐」「ギヤマン ビードロ」「友よ」などになった。林は友人たちと取り壊し前の母校を訪問したときの（語らい）をもとにして「空罐」だけでなく「ギヤマン ビードロ」や「友よ」などを書いたのだという。当初から（予定していた話のなかの、一つ）であり、（空家になった母校を訪ねた）ときのことを描い

た「空罐」が連作短篇集『ギヤマン ビードロ』の（冒頭）に置かれているのは、この母校訪問が連作の（芯になる話）を書くための、いわば芯の芯にあたる重要な経験だったからだろう。アスマンが（人々が想起の場所に期待するのは、その場所から離れた記念館や資料館でも伝えることのできる情報以上のもの、つまり感覚的に実見することで高められる強烈さ）であり、それは（いかなるメディアによっても複製することのできない、場所のaura）であると指摘する通り⁽³¹⁾、場所はそこでどのようなことが起こったのかを想起あるいは想像させ、記憶させる、他のものには代えがたい強い力を持っている。林にとって元長崎高等女学校の（校舎）は（八月九日）に（動員先）から（まっすぐ帰っていった）記憶や（戦後）に（始業式）や（追悼式）が行われた記憶と



「長崎高等女学校跡地」(2019年11月29日中野撮影)

分ちがたく結びつき、それらをまざまざと思い出させるかけがえない場所であり、それ自体が原爆によって〈満身創痍〉になってしまった被爆遺構の一つでもあった。それが〈取り壊される〉ことを知って〈数人の友人たち〉とそこを訪れて〈記憶に刻んで〉おこうとする林の言動からは、そこから立ち上がってくる記憶や印象などを噛みしめ、失われる場所に代えてそれらを書き残そうとする強い思いが伝わってくる。

だからと言って「空罐」はただ母校を訪問したときのことを忠実に再現しただけの小説ではない。そこには先述した名前の書き換え（それは実名を伏せるとともにモデルにしばらく書かず自由度が増すことも意味する）にとどまらない、さまざまな修辭が駆使されているのである。「空罐」は次のように語り出されている。

校舎は、コの字形のコンクリート四階建てである。私たち五人は、その校舎に囲まれた中庭の、ほぼ中央に立っていた。時間は午後一時半をすぎている。太陽は西に廻りはじめて、中庭には校舎の影が写っている。五人が立っている場所も、既に陰になっている。

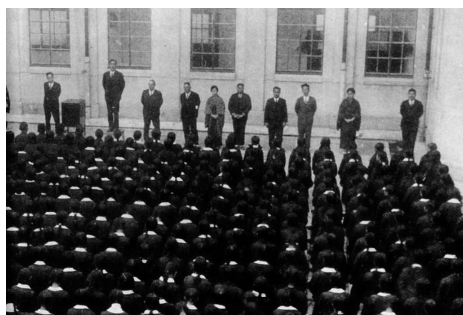
「私」たち（五人）（私・大木・西田・原・野田）はもちろん〈校門〉から校内に入ったに違いないのだが、それは〈さつき、校門を入る時に〉と後に語られ、先に語られるのは〈中庭〉のことである。〈校門〉から〈中庭〉へという出来事の順序（ストーリー）を〈中庭〉から〈校門〉へという語りの順序（プロット）に変えて冒頭に示すことによって〈中庭〉の印象が強調されているのである。その印象とは「私」たちが〈コの字形のコンクリート四階建て〉の〈校舎に囲まれた中庭の、ほぼ中央〉に立ち、そこは〈校



校舎全景（『たちばなの歩み一〇〇年』2000・10）

舎〉の〈陰〉になっているということ、つまり「私」たちがその〈場所〉の中にしつかりと入り込み、包み込まれているということである。そのような場所で「私」たちは〈講堂〉〈洗面所〉〈職員室〉〈校門〉〈玄関の車まわし〉〈便所〉〈窓〉〈更衣室〉〈生徒専用の通用口〉などを次々に見たり思い出したりする。高野光男が〈この作品では、中庭、講堂、教室が「私たち五人」のさまざま「記憶」を想起させる装置である〉と指摘する通り⁽²⁾、母校という場所との関わりから私たちが次々に思い出すことを描くのがこの小説の大きな枠組みになっており、それを読者に印象づける場所として〈校舎に囲まれた中庭の、ほぼ中央〉という中の中が選ばれているのである。

〈中庭〉で「私」たちがまず思い出すのは、そこで行われていた〈朝礼〉のことである。これは大木が〈洗面所の使用法について、一言〉と〈恩師〉のものまねを始めたことがきっかけになっている。「私」はその〈洗面所の使い方を注意する先生〉の〈仇名〉を思い出して〈かめのこだわし〉と〈大声で〉叫び、原は思わず〈職員室に聞こえるよ〉とたしなめる。しかし〈かつての私たちの母校は、来年一杯で廃校になってしまう〉のであり、



朝礼(1931年)『たちばなの歩み一〇〇年』

真似をしている)の(理科の男教師)であり、(朝礼台)から(生理用具の処理のしかた)などを(注意)されて(少女である私)たちは恥ずかしかった)ことを思い出し、(中庭に立って、まず先に大木が想い出したのも、恥ずかしい思いが印象に深かったからだろう)と推測する。この(朝礼)の思い出は原爆には直接的に関わらないものである。

その上で「私」は(校舎の窓)という原爆に関わる思い出を語り始める。「私」は(校舎)の(一階、二階と、壁面で階を追いつながら)視線を移し、それを(四階、三階と下ろしていった)ときに(各階の窓のことごとくに、ガラスがきれいに入っている)ことに気づいて、それが(奇妙に見えた)と違和感を覚える。それはかつては次のような状態だったからである。

すでに(生徒たちも、長崎市街を見おろせる台地に建った、新校舎に移転してしまっている)のである。原も(校舎の内には、私たち以外には、誰もいない)ことはよく分かっている。それにもかかわらず彼女が思わず(職員室に聞こえるよ)と言ってしまうことよって、母校という場所がいかに強く「私」たちの記憶を喚起しているかが示されている。「私」は(大木が口

昭和二十年の八月九日の、原爆投下後から卒業するまでの二年間、この校舎には窓ガラスが一枚もなかった。爆風で弓なりに反った窓枠の隅に、サメの歯のように尖ったガラス片が処どころ、残っている程度だった。原爆で(校舎の窓)のガラスが吹き飛び、枠もゆがんでしまったことについては、当時長崎高等女学校の生徒だった平田みち子も(校舎は、その山かげに建っているからこは、何ともないだろうと思っていました)が、ここでさえ、窓ガラスは、みじんにこわれ、窓枠の鉄骨は、ぐにやぐにやまがっています」と証言している⁽²³⁾。また当時同校の教員だった吉富新一も校舎の状況について次のように証言している⁽²⁴⁾。

校舎本館は四階建て鉄筋コンクリート造り頑丈な建築である。窓の硝子戸は堅牢な鉄枠の外開きであるが、北西側の爆風をまともにうけた窓の鉄枠はことごとく逆にく”の字形にへし曲げられた。硝子はあます所なく、みじんに砕かれ、破片は教室に廊下に外庭に飛散した。

南東側に面する硝子戸は、外側に押し退け歪められた。各室のモ



迷彩校舎(1945年)『たちばなの歩み一〇〇年』

ルタル塗装の内壁は壊され夥しい硝子の破片が突き刺さっていた。

大講堂の天井は落ちて破壊。(略) 理化学室の実験用器具類、裁縫室のミシン、音楽室のオルガン、ピアノ等も残すところなく破損し、かつ雨風に濡れ晒されて少なからず損害を被った。

長崎高等女学校の窓のガラスが割れ、枠がゆがんだままの状態が被爆後数年間続いていたことを示す写真も残されている。「私」が〈各階の窓のことごとくに、ガラスがきれいに入っている〉ことに違和感を覚えたのは原爆が〈コンクリート四階建て〉の〈校舎〉に与えた衝撃の強さを示すものとして割れた〈窓ガラス〉とゆがんだ〈窓枠〉のことが強く印象に残っていたからだろう。「私」は〈講堂側の窓に五、六カ所、流行のアルミサッシの枠がある〉ことにも気づき、〈白い水の跡や、パテが目立つ赤さびた鉄枠の



1946年頃(『たちばなの歩み一〇〇年』)



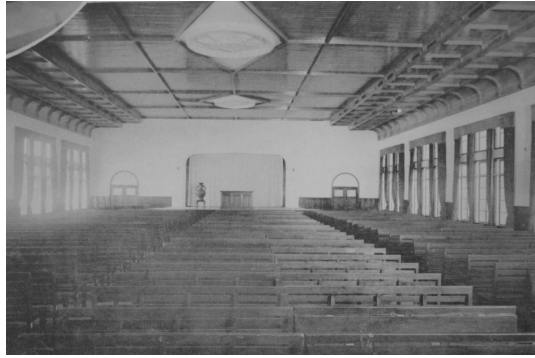
予餞会(1947年)(『たちばなの歩み一〇〇年』)

窓の中で、取ってつけた新しさが浮きあがっていた)と古い〈校舎〉と新しい〈窓枠〉との不調和に〈三千年〉という時間の経過を実感する。

このように「私」は〈朝礼〉という原爆に関わらない記憶(それゆえに被爆体験がない読者にも想像しやすいこと)から〈校舎の窓〉という原爆に関わる記憶へと、いわばフェードインすることによって、被爆体験

がない読者を時空を超えた作品世界へと誘っているのである。そして〈被爆者ではない〉ことが後述される西田に〈この庭、こんなに狭かった?〉と言わせ、〈浦上の兵器工場で被爆した〉ことが後述される原に〈うちもいま、同じことを考えとったとよ〉と応えさせることによつて、〈私たち五人〉の中で〈三十年前〉の記憶がしつかりと共有されていることが強調される。「空罐」冒頭の〈中庭〉は「私」たちが共有できる記憶を浮かび上がらせる場所として描かれているのである。

三 講堂——「共有できない記憶」を浮かび上がらせる場所



講堂(写真帳『新築記念県立長崎高等女学校』)

〈中庭〉ではしつかりと記憶を共有できていた「私たち五人」だったが、〈講堂〉では事態が一変する。〈講堂〉で「私」たちが目にしたのは(天井)こそ(色あいても、十センチ巾の板目も三十年前そのまま)であり、(乳色の球状をしたシャンデリアも、当時のまま)であるが、校舎移転のために(ピアノも、式次第を書きしるす黒板も、道具類は、運び出されて)し

まい、(背もたれが折れて、使いものにならない長椅子)や(乾いた雑巾)の他には(何も無い)閑散とした光景であった。これは「私」たちに原爆投下によって壊された学校の光景を彷彿させるものだったかもしれない。原が(悲しゅうなる)とつぶやき、その言葉を継ぐように「私」が(追悼会)とつぶやき、大木と野田が(無言でうなず)く。この四人が(講堂)でまず思い出したのは(終戦の年の十月に行われた、原爆で死亡した生徒や先生たちの、追悼会)のことであった。この〈講堂〉はかつて原と大木

たちが(被爆した重体の体)を(横たえた想い出)がある場所であり、〈追悼会〉のときには(生き残った生徒たち)と(死亡した生徒たちの父母)が参列して(被爆死)した(教師)や(生徒たち)の(名前)を(壁の端から端まで、四、五段に分けて)貼り、(担任教師)がその(二人一人の名前)を(読みあげ)て(おえつ)に包まれた場所であった。「私」は(悲しゅうなる、とつぶやいた原の言葉は、各人の胸によみがえった、あの日の想いを、素直に言い表していた)と(私たち)が(追悼会)のときの感情までを共有していると語る。

しかし、この(私たち)に西田は含まれていない。(終戦の年の十月、追悼会の日)に(転校して来た)という西田は他の四人のように被爆体験はなく、(追悼)すべき(生徒や先生たち)のこととも知らない。西田は(原爆の話になると、弱い)のよ)と言い、(弱い、というのは結びつき方で、弱さの原因は被爆したかしないかにある)と説明するが、この(弱い)という言葉には、単に(結びつき方)の希薄さだけではなく、高橋英夫が西田には(自分は被爆者ではないんだからというひげ目)というか、遠慮というか、ちよつと一歩わきへそれよとする(気持ち)があり、それは(ひどい目に遭った人ほど絶対的)なんで、どうしても経験の程度によつて、その問題に対する発言力の序列が決まってしまうというような、(どうしようもない強制力)が働くからであると指摘する通り⁽²⁵⁾、被爆者でないがゆえに他の四人と原爆についての記憶や感情をうまく共有できないという引け目と疎外感が表れている。その様子を見て取った大木が(被爆は、せん方がよかに決まるとるやかね)と言い、西田は(いい、わるいじゃなくて、心

情的にそうありたい」のだが、自分が（長崎弁をうまく使えない）のと同じように原爆についての記憶や感情をうまく共有できないのだと語る。村上陽子が西田は長崎弁という方言を（削ぎ落とすことも習得することも困難な言葉）として捉えて（非当事者として被爆体験に接することの「ぎこちなさ」になぞらえている）と指摘する通り⁽²⁶⁾、西田は被爆していない者が原爆の記憶を共有することの難しさともどかしさを長崎で暮らしていない者が（長崎弁）を使おうとしてもうまくいかないことに重ねて（特に昭和二十年の三月に、N高女に転入）した「私」に（わかるでしょう）と理解を求めているのである。

西田は（あなたたち四人は、講堂の入口に立った瞬間、泣き出しそうな顔をした、あの時、あなたたちが考えたことは、追悼会のことでしょう）と言い、自分の（脳裏に浮かんだ）のは（転校早々に行われた全校生徒の弁論大会）の（情景）なのだという。西田にとっては、転校してきたばかりにもかかわらず（クラス代表に選出され）て（講堂の舞台）に上がり、大木ら他のクラスの代表者たちと（優勝を競った）という（弁論大会）の方が知らない（生徒や先生たち）の（追悼会）より印象が深かったのだと考えられる。このように（講堂）は「私」たち四人にはまず（追悼会）のことを思い出させる場所であり、西田一人にはまず（弁論大会）のことを思い出させる場所である。冒頭の（中庭）とは違い、（講堂）は共有できない記憶を想起させる場所として描かれているのであり、この記憶の分断はまず被爆体験の有無によって生まれるものとして描かれているのである。

被爆体験の有無は記憶の分断だけでなく、現在の生き方の違い

も生み出している。（弁論大会）に登壇したときの大木の（テーマ）が（婦人と職業）であったことから話題が現在のことに移り、（中学校の教師を職業として選んだ）大木が（原爆症の再発）を恐れて（長崎市にある原爆病院）から遠い（離島）の（中学校）へ（赴任）するのを（不安）に思っているということに対して、「私」が（大木が躊躇する気持ちは、同じ被爆者である私には理解できた）と共感を示すのに対して、西田は（むごいことを言うようだけれど、予定が組まれたら進まなきゃならない、それが生きるってことじゃない、たどえ病気であってもよ）と言う。もちろん西田は大木をただ突き放しているのではなく、村上陽子が指摘する通り（被爆以後の時空間を友人たちと共有することに、体験の有無を越えてともに生きる未来を見ようとして）激励しているのだが⁽²⁷⁾、大木としてはその（未来）に（原爆症の再発）という逃れがたい（不安）があり、（離島赴任）も目前に迫った現実的な問題であるため、西田の言葉には彼女自身が恐れる通り（むごい）ものになりかねない危うさもある。

被爆体験の有無、それに根ざす記憶の分断と現在の生き方の違い。原が（生き残って三十年、ただ生きてきただけの「ごたる気のある」と言い、大木が（うちたちは原爆にこたわりすぎるとやろうか）といつまでも原爆にとらわれていてはいけなないのかと自問を口にして被爆者と非被爆者の分断が強調されたところで、野田が（話題をかえ）て（きぬ子は、今日は来ならんか？）と尋ね、大木も気まずい雰囲気を取り繕うように（頓狂な声）をあげて、きぬ子は（原爆病院にあした、入院）する準備のために（今日の母校訪問）に（急に、出席できなくなつた）のだと事情を説明す

る。高野光男が「空缶」に登場する六人の同期生のうち、「きぬ子」だけが姓ではなく名で呼ばれているのは（この小説の中心的な登場人物として差異化するためとも考えられる）と指摘する通り⁽²⁸⁾、きぬ子だけを名で呼ぶことよって「空缶」という題名に深く関わる人物として際立たせ、また〈母校訪問〉に来るはずだったのに来られなかった不在者として他の登場人物（と読者）の注目が集まるように描かれている。今は〈島原で小学校の教師をしている〉きぬ子は〈体育の授業〉で〈子供たちに前転をさせていた〉ときに〈背中〉に〈尖った痛みがした〉ことから、原爆で〈ささったガラス〉が体内に〈幾つか〉残っていることが分かり、それを〈切開して〉取り出すために〈入院するのだ〉という。きぬ子について、西田は〈弁論大会に、一緒に出た人じゃない〉と思ひ出し、野田は〈あん時は、坊主頭やったね〉と応え、原は〈命について、話したたね〉と言ひ、大木は〈おとうさんも、おかあさんも即死しなつたけんねえ〉とその背景を語る。

しかし「私」は〈丸坊主で演壇に立つたきぬ子も、在学中のきぬ子も〉〈覚えていないし、知らない〉という。〈在学中〉のきぬ子について「私」以外の四人は思ひ出せるのに、なぜか「私」一人だけが何も思ひ出せないのである。「私」と他の四人との間に現れたこの新たな記憶の分断は何を意味するのだろうか。「私」は〈弁論大会〉があつた当時〈原爆症で発熱が続いており、正規の授業がない日には、なるべく休むようにしていた〉ため〈多分、弁論大会の当日も休んでいたのたろう〉という。だとすれば、この記憶の分断も西田（非被爆者）と他の四人（被爆者）との分断と同じように「私」（弁論大会非参加者）と他の四人（弁論大会参

加者）の体験の有無に根ざす分断と考えるとよいのだろうか。しかし、たとえ「私」が〈弁論大会の当日〉に〈休んでいた〉のだとしても、〈在学中〉という長い期間についての記憶の分断については説明がつかない。このように謎を残しつつ、〈講堂〉は〈追悼会〉については西田と他の四人で記憶が共有できず、〈弁論大会〉と〈在学中〉のきぬ子については「私」と他の四人で記憶が共有できないことを浮かび上がらせる場所として描かれている。

四 K寺——「忘れようとしても忘れられない記憶」を浮かび上がらせる場所

〈講堂〉では〈弁論大会〉の記憶は共有できなくても〈追悼会〉の記憶は他の被爆した同級生たちと共有できていた「私」だつたが、〈K寺〉の回想では事態が変わる。「私」は〈女学生時代のきぬ子〉を知らないことと、再び〈弁論大会〉だけでなく〈在学中のきぬ子〉を知らないことを強調した上で〈きぬ子とつき合うようになったのは、同窓会か同年会で同席して、それから、つき合いがはじまつたようである〉といつ交流が始まつたのかも曖昧にしか覚えていないことを語る。さすがに〈昨年、十年ぶり〉に会つたときの記憶は鮮明で、「私」はきぬ子と二人で〈長崎市内の上町にあるK寺〉に行き、被爆した〈当時二十四、五歳〉で〈N高女の先輩〉だつた〈私たちの恩師〉であり、〈八月九日、きぬ子と同じ職場の精密機械工場で即死した〉T先生の〈墓参り〉をしたことを思ひ出す。〈K寺のお嬢さん〉でもあつたT先生の〈墓〉はそこにあつたのだつた。〈K寺〉とT先生のモデルになつてい



立花玉枝(「朝日新聞(長崎県版)」2018・11・20)

るのは長崎市玉園町にある観善寺と先述の通り立花玉枝先生である。立花先生の姪の増山暁子によれば、立花先生は(原爆から数日後に発見された姿は変わり果てて)おり、(火葬される前)に(遺体を見ようとしたが、「おばちゃんのきれいな顔を覚えておきなさい」と、祖母に止められた)のだという⁽²⁹⁾。また(生徒を監督していた動員先の工場で機械の下敷きになった)立花先生の遺体は(玉枝さんの母のマサさんが捜しに行き、見つけた)後、(観善寺の山門の横で火葬された)が、(原爆から何年経つても、8月9日になると玉枝さんの教え子たちが観善寺にお参りに来た)のだという⁽³⁰⁾。これも先述の通り、林京子の作品ではモデルの人名や地名があえて遠ざけられている場合も多いが⁽³¹⁾、「空罐」においては観善寺が(K寺)、立花先生が(T先生)とそのままインシャルに置き換えられているのである。

「私」たちが(墓参りを終えた)後に(K寺の、町を見おろせる檜の木の根元に坐って、T先生の想い出話をしていた)ときにきぬ子は彼女が見たT先生の最期について次のように語る。

きぬ子は、T先生の即死の現場を見ている。遺体を確かめたわけではないが、閃光に顔をうたれて、光の中に溶けて見えなくなった瞬時を、目撃している。その時T先生は、きぬ子に向かつて、大きな口をあけて何事かを叫んだ。言葉は、勿論聞きとれなかった。単なる叫び、だったかもしれないが、きぬ子はT先生の最後の言葉を、何とか理解してあげたい、と思い続けた。開いた唇の形を脳裏に繰り返し描いて考えているうちに、いつの間にか、T先生はきぬ子の頭の中に貼り絵のように、貼りついてしまった。

聞きとれなかった言葉は、きぬ子の心の負担になって、この頃では、あの情景が事実だったのか、T先生は本当に死んだのだろうか、と、それさえも疑うようになっていたのだ、と言った。K寺に墓参りに来たのも、曖昧になりつつある過去を確かめる意味と、はつきりT先生の死に決着をつけるためだ、と言い、この檜の木の根元で、T先生を焼きなすった、住職夫人はいいになったね、と私に住職夫人の言葉を確認させた。

きぬ子は(T先生の最後の言葉を、何とか理解してあげたい、と思いつく)、(開いた唇の形を脳裏に繰り返し描いて)いるうちに、(T先生はきぬ子の頭の中に貼り絵のように、貼りついてしまった)のだという。中澤正夫は(被爆者の場合、定義されたPTSD(心的外傷後ストレス障害——中野注)概念では収まりきらない)

ところが、その一つに〈外傷記憶があまりに強烈なので、棚上げしていても、ちょっとした刺激（閃光や雷鳴や肉の焼けるにおいなど）で記憶が再現して、一瞬にして被爆当日に連れ戻らされて〉しまうことがあることを指摘している⁽³²⁾。また中澤は〈フラッシュバックは繰り返しているうちに微妙に変化してくる〉ものであり、被爆者の中で〈自分が生きていくことの罪〉が強くなると、フラッシュバックをおこすたびに「助けることのできなかつた」個人的なできごとの比重が増してくる傾向があることも指摘している。きぬ子はT先生の犠牲によって生きのびたわけではないし、T先生を見捨てたわけでもないが、それにもかかわらず背負ってしまうのがいわゆるサバイバーズ・ギルトでもあるので、きぬ子を感じている〈心の負担〉もそのような心理に根ざすものと考えられる。

きぬ子のT先生の記憶への向き合い方については、積極的な側面もある。深津謙一郎は次のように論じている⁽³³⁾。

きぬ子の記憶の中のT先生の唇は、条理化を拒む他者として、けつして清算・昇華されることがない。それは言い換えれば、T先生の「個別一回の死」が、きぬ子の中で「生き続ける」こと、つまりT先生が「個別一回の死」を死んだその出来事が、きぬ子によって分有されたことを意味するのではないか。そうして、出来事の不条理が「生き続ける」がゆえに、それは（相談という形で）「私」に打明けられ（分有され）、「私」をつうじてこんどは「私」の読者に受け渡され（分有され）ていく。

深津は〈条理化〉や〈清算〉を拒むT先生の〈個別一回の死〉を

〈国民を主語にした「抽象的な死」-とは対照的なものと捉え、そのようなT先生の記憶をきぬ子が〈不条理〉な〈負債〉として「私」たちと〈分有〉することが〈体験／非体験の差異を極小化〉する（きぬ子も「私」たちも〈T先生の「個別一回の死」の核心を知らない点において〉同じであることを示す）ことにつながり、〈戦争の記憶の分有の在り方〉について、国民の物語とは相容れない、ひとつの可能性を示唆することにつながるのだと論じている。深津はさらにデリダの亡霊という観点にも結びつけて〈体験の核心部とは、そこにいる者（とどめ置かれた者）は決して言葉を発せないという意味で「死者の領域」、すなわちT先生がいる場所であり、きぬ子・「私」・読者の三者は等しく、そこからは決定的に隔てられて〉おり、〈この隔たりを埋めえない不安が〈亡霊〉の姿をとり、きぬ子にとり憑くのであれば、決して清算しえないその隔たりを感知する限りで、きぬ子に憑いたのと同じそれが「私」や読者にとり憑く可能性もあるのではないか〉とも論じている⁽³⁴⁾。

川口隆行も深津論を参照しつつ〈どうにかして「わかろう」とし、それでも「わからない」まま苦闘するからこそ、T先生の最後の言葉はきぬ子のなかで生き続けている〉と論じている⁽³⁵⁾。つまり、きぬ子のT先生の記憶への向き合い方の積極的な側面とは、T先生の〈最後の言葉〉の内実を分らないまま問いつづけ、その死の意味づけられなさをも語り伝えることによって、被爆者と非被爆者の分断を越えて死者の理解しがたさを分かち合い、それによって戦争の死没者を今日のわれわれをあらしめた犠牲者として抽象化して集団的に記憶しようとする排他的な「国民の物語」とは異なる形で記憶を共有する可能性を示していることにある。

ただし、その積極的な側面は消極的な側面と一体のものである。デリダが〈この外傷（ここではマルクスがもたらした外傷——中野注）は、それをやわらげ、同化し、内面化し、体内化しようとする運動そのもののなかで、果てしなく否認され続ける〉ものであり、〈進行中のこの喪の作業、その果てしない使命において、幽霊は最も多くのものを考えさせるべく——そしてなすべく——与えるものであり続けている〉と指摘する通り³⁶、〈亡霊〉とはフロイトの言う〈喪の作業〉（死者に対する備給エネルギーを時間をかけて消費しながらその追想から解放されていく作業）がうまくいかず、死者を忘れることも苦痛をとまなわなない形で記憶することもできないときに生者に何かを知らせ、考えさせつづける他者性を發揮するのである。きぬ子にとつてT先生の記憶とはまさにそのようなものとして彼女の中にありつづけている。

骨も拾うたつて、いいなつたね、もう、死になつた人のことは忘れてしまつてもよかよねえ、きぬ子は私を真似て、樫の木を叩いて言つた。そのとききぬ子は、痛い、と小さい叫びをあげて、手のひらを撫でた。手のひらには、傷口も、出血もなかつた。とげをさしたの？ 不思議に思つて私は聞いた。

「ガラスさ」ときぬ子は、それだけ答えた。その時の、抑揚のないきぬ子の言葉を、私は想い出していた。

きぬ子も〈N高女の先輩〉であり、〈当時二十四、五歳〉と比較的年齢も近く、〈兵器工場に動員された生徒について出向〉してきていたT先生をのこを慕っていたに違いない。慕っていただけにT先生が〈閃光に顔をうたれて、光の中に溶けて見えなくな

つた瞬間〉という光景は恐ろしく、T先生の〈聞き取れなかつた言葉〉は〈心の負担〉になつているのだと考えられる。つまり、きぬ子はT先生を慕っているが、それゆえにいづそうその尋常ではない最期を思い出すのが苦痛であり、忘れたかと思つているのである。しかし、きぬ子が〈もう、死になつた人のことは忘れてしまつてもよかよねえ〉と口にした瞬間、それを許さないかのように、きぬ子の手のひらの中に残つていた〈ガラス〉が〈痛み〉を与えらる。〈とげをさしたの？〉という「私」からの問いにきぬ子が〈ガラスさ〉と即答していることには、すでに彼女が自分の手のひらの中に〈ガラス〉が残つていることを自覚していることが表れており、その言葉に〈抑揚のない〉ことには、当時のことを忘れるようとしても〈ガラス〉のもたらす〈痛み〉みによつてそれが阻まれるということがすでに繰り返されておき、その支配を逃れられないという無力感が彼女の中にあることが表れている。

これは〈K寺〉の回想が終わり、「私」の意識が〈講堂〉に戻つたときに聞いた（あるいは別の機会に聞いていたのかもしれない）大木の発言に接続されている。

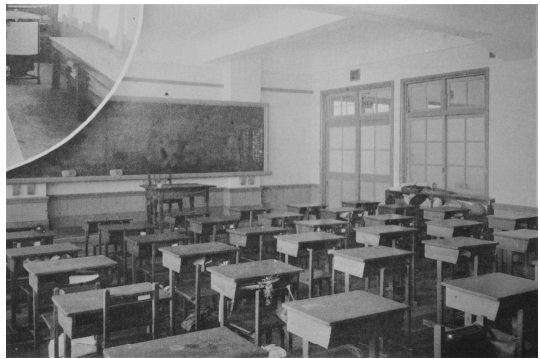
「人間の体は、よう出来とるね」と大木が言つた。四、五年前に大木の背中からも一個、ガラスが出てきた。医師に、切開をして出してもらつと、真綿のような脂肪の固まりが出てきた。四、五ミリの、小さいガラス片は脂肪の核になつて、まるく、真珠のように包み込まれていた、という。

被爆者の体内に原爆のときのガラス片が長く残つたままになつていふという例は多く報告されているが、この大木の言葉は高野光男が〈人間の身体について述べているだけでなく、被爆による精

神的な痛み、つらさが周囲のさまざまな支えや理解によって、和らいだりすること、自らの被爆の記憶を何かで包み込む、つまり記憶を曖昧化させたり、忘却したり、遠ざけたりすることで日常の安定を得ることについても言っている」と指摘する通り⁽⁵⁷⁾、きぬ子の〈ガラス〉の挿話の直後に配置されることによって、体内異物に対する身体的な反応だけでなく、外傷記憶に対する精神的な反応までを暗示するという意味の広がりが生まれている。つまり、きぬ子がT先生の最期の光景に苦しみつづけていることは、〈ガラス〉を〈脂肪〉で包むように外傷記憶を忘却や記憶の曖昧化によって和らげようとしても傷が深すぎてそれがかなわないことを表しているのである。このように〈K寺〉は被爆者にとって忘れようとしても忘れられない記憶があることを浮かび上がらせる場所として描かれている。

五 教室——「忘れようとして忘れていた記憶」を浮かび上げらせる場所

「私」は〈K寺〉できぬ子の忘れたくても忘れられない記憶に触れていたが、小説の結末部でたどり着く〈教室〉ではそれが他人事ではなかったことを知る。「私」たち五人は〈講堂〉を出て〈何組だった?〉と銘めいの担任と級を確かめあいながら、廊下を歩くが、「私」は自分の〈教室〉がどこだったかをうまく思い出せない。〈コの字形の校舎〉の〈角の教室〉で大木から〈きぬ子は、この教室やったよ、同じクラスやったと〉と聞かれると、「私」は〈違う〉と答える。しかし〈角の部屋のドア〉や原爆の

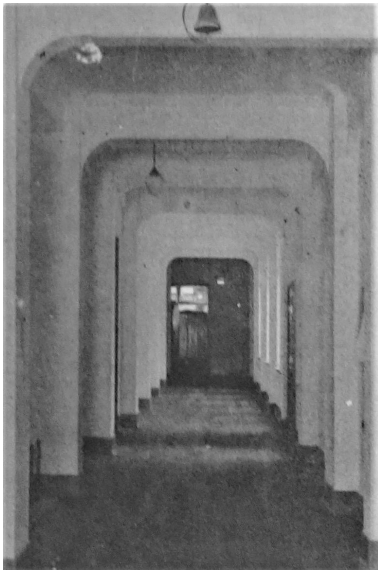


教室(写真帳『新築記念県立長崎高等女学校』)

と尋ねられて、「私」は〈ああ〉と〈叫ぶ〉。ようやく「私」は〈あの少女が、きぬ子だったのか〉、〈それならばきぬ子と私は、クラスメートになる〉と自分ときぬ子が同じ〈教室〉にいたことを思い出す。

きぬ子は〈三十年前〉に〈両親の骨を手さげカバンに入れて、登校して来ていた〉のだった。それは〈赤く、炎でただれた蓋のない空罐に、骨を入れ〉て〈骨がこぼれ落ちないように、口に新聞紙をかけて、赤い糸で結わえ〉たものであった。両親の遺骨が、骨壺等ではなく〈赤く、炎でただれた蓋のない空罐〉に入れられて〈新聞紙〉で蓋をされていることには、やむをえず遺骨を〈潰

衝撃で壁に空いた〈大穴〉の記憶を手がかりに「私」は〈角の教室は、やはり私のクラスのように思えた〉と自分の〈教室〉のことを思い出していく。そして当時のことを〈些細な部分まで、記憶していた〉大木から〈覚えてくる?〉〈きぬ子の空罐?〉〈空罐におとうさんと、おかあさんの骨ば入れて、毎日持ってきたらよかったでしう〉



廊下

(写真帳「新築記念県立長崎高等女学校」)

物用の壺⁽³⁸⁾や(花瓶)⁽³⁹⁾や(紙箱)⁽⁴⁰⁾に入れたといった他の証言が示す通り、原爆投下直後の物質的な困窮が表れている。また、きぬ子の(両親の骨)が分けられずに一つの(空罐)に入れられていることには、遺骨を見つけたときに父親と母親のどちらのものとも分からなくなっていたという原爆死没者の遺骨の匿名化が暗示されているのかもしれない⁽⁴¹⁾。きぬ子がそのような(空罐)の(口)を(赤い糸で結わえ)ていること⁽⁴²⁾、何より遺骨を入れた(空罐)を持つて登校していることには、亡き両親との結びつきを大切にし、二人のことを忘れまいとする強い思いが表れている。きぬ子が(空罐)を扱うときの(両手で抱きあげるよう)な手つきや(いかに愛しそう)な指先にも亡き両親への愛情がしみみと感じられる。

このようにきぬ子はT先生の最期は忘れようとし、両親のことは忘れまいとしているのであるが、両親については何も語ろうと

しないので、その胸中については分からないところが多い。きぬ子は当初(空罐の中身が何であるか)を学校の誰にも(話そうとしな)かったが、(ある日)の(書道の時間)に(復員して帰ってきた若い書道の教師)に(その罐は何だ、机の中に入れ)と注意され、(うつむいて、空罐をモンペのひざに抱いた)まま(泣き出し)、ようやく(とうさんと、かあさんの骨です)とだけ答えたのだった。「私」が(昨年、K寺で逢った)ときにも、きぬ子は両親の話には触れず、(現在の生活も、過去の生活も、いっさいを口にしなかつた)のだった。なぜ、きぬ子はT先生の最期については(開いた唇の形)といった細部までを語るのに、両親については何も語らないのだろうか。それはきぬ子にとってT先生の最期が一人では抱えきれないほど大きな(心の負担)になっているからなのか、T先生の(最後の言葉)という謎が大きすぎて誰かの考えを聞きたいからなのか、両親の死があまりに大きな心の傷になっていて語りたくても語れないからなのか、両親の死について誰に何を語っても理解してもらえないと諦めているからなのか、もつと他の理由があるからなのか、確かなことは何も分からない。ただ、きぬ子が原爆投下後の(三十年)を生きるためには、T先生の最期を忘れようとし、両親のことは忘れまいとすることが必要だったのだろうという推測が成り立つだけである。

一方、「私」のきぬ子に対する記憶については不自然なところが目立つ。「私」はきぬ子が(空罐事件)の(少女)であったことを忘れていた理由を(空罐の持ち主が誰だったか、と言うことよりも、事件そのものの方が、印象が深くあった)からだと説明する。(事件)の印象が強すぎて、その当事者のことは忘れてし

まっていたというのである。しかし客観的に見て、これまでの「私」の発言はこの説明には収まらないものがある。「私」は〈校舎〉を訪れた五人の中でただ一人、〈在学中のきぬ子も私は覚えていないし、知らない〉、〈女学生時代のきぬ子知らない〉、きぬ子とは〈違う〉クラスだったと〈在学中〉のきぬ子との接点を繰り返し否定してきたのである。「私」より遅れて、別のクラスに転校して来た西田でさえ〈女学生時代のきぬ子〉のことを覚えていたのに、である。別のクラスにいた大木⁽⁴³⁾でさえ〈きぬ子の空罐〉のことを覚えているのに、である。〈三十年前〉には〈丸坊主〉だったきぬ子が〈空罐をモンペのひぎに抱い〉て〈泣き〉ながら〈とうさんと、かあさんの骨です〉とやつと口にしたのを

「私」はこの〈教室〉にいて目撃していたのに、である。いくら〈事件そのもの〉の〈印象が深〉いからといって、当事者のことをここまで忘れるものだろうか。たとえ〈三十年前〉のことであっても、十代半ば⁽⁴⁴⁾に目にした出来事ならば〈印象が深く〉なればなるほど、むしろその当事者のことが忘れられなくなるものではないだろうか。「私」だけがきぬ子のことを知らな過ぎであり、忘れ過ぎであると言わざるをえない。少なくとも〈三十年前〉の「私」が原爆で級友も減ってしまった同じ〈教室〉にいて、〈空罐〉の〈持ち主〉がきぬ子であることを〈知らな〉かったとは考えられない。だとすれば、おそらく「私」はどこかの時点で〈在学中〉のきぬ子のことを忘れていたのだと考えるほかない。そのどこかの時点とは「私」が〈空罐事件〉に遭遇してから〈同窓会か同年会で〉きぬ子と〈同席〉する十一年前⁽⁴⁵⁾までのどこかである。そもそも〈同窓会か同年会〉で〈同席〉して、〈何組だった?〉

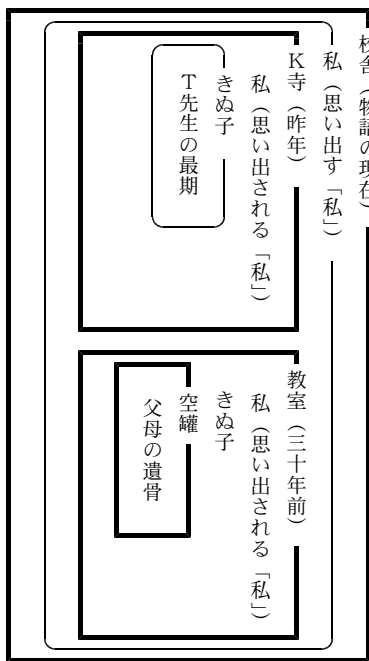
と銘いめの担任と級を確かめ〉合わないなどということがあるだろうか。しかも〈昨年十月〉には「私」ときぬ子は二人で〈K寺〉に出かけてT先生の墓参までしているのである。そこまでの関係がありながら、お互いがどのクラスにいたかを確かめ合わないのは不自然であり、「私」が〈在学中〉のきぬ子について何一つ思いつかないのも不自然なのである。この不自然さは「私」が〈在学中〉のきぬ子のことを忘れようとし、忘れたことも忘れていたのだと考えなければ説明がつかない。

問題はなぜ「私」がそれほど強く〈在学中〉のきぬ子のことを忘れようとしていたのか、ということである。ここで注目されるのが〈空罐事件〉は、私の少女時代に錐を刺し込んだような、心の痛みになって残っていた」という言葉である。川村二郎が〈忘れていたことをパツと思いつくことによつて、もう脂肪でさえも包み隠したいような、なまなものが、「私」の胸にいきなり衝撃として来た〉と指摘する通り⁽⁴⁶⁾、また川口隆行が〈錐を刺し込んだような〉という喩は、きぬ子の背中に埋もれたままの「ガラス片」のイメージと重ねられている⁽⁴⁷⁾と指摘する通り、「私」が感じる〈錐を刺し込んだような、心の痛み〉はきぬ子が体内の〈ガラス〉から感じる〈尖った痛み〉とイメージが重ねられている。つまり「私」にとつての〈空罐事件〉とは、きぬ子にとつてのT先生の最期の記憶に似て長い時間が経つても消えない〈痛み〉を感じさせるものである。「私」が〈空罐事件〉に〈心の痛み〉を感じるのとはそれが非常に痛ましい出来事だったからに違いないが、それだけならばそれを直接見た「私」がこの〈教室〉にいなかった大木よりも〈きぬ子の空罐〉事件としてよく覚えていても

いいはずである。きぬ子や大木と比べて浮かび上がる「私」の特徵は、被爆者ではあるが、きぬ子のように〈丸坊主〉になったり〈背中〉や〈手のひら〉に〈ガラス〉が突き刺さったりという原爆による目立った身体的な外傷がなく、原爆で両親を失つてもいないということである。また「私」は大木のように〈浦上の兵器工場で被爆した重態の体を、この講堂の床に横たえた想い出〉もなく、〈背中や腕にガラス片がささった〉ことによる〈出血〉のために一時は〈死亡説〉まで出たという体験もない。転校生であった「私」は〈小学校から入学試験を受けて、選ばれて入学した、はえぬきのN高女の生徒ではない〉というひげ目があったというが、佐佐木幸綱が「私」は、ガラス片を体内に埋め込まれるとか、火傷を負うとか、被爆しながらも外側から見える傷は幸いにまぬがれ、〈被爆が直接の原因である死者を家族からは出していない〉ために〈一瞬にして両親を失った「きぬ子」のような〈友人に対するとき、「私」には、微妙なうしろめたさと遠慮の気持ちがおのずから萌すのである〉と指摘する通り⁽⁴⁸⁾、被爆者としてもより多くの傷を負ったきぬ子や大木に対してひげ目を感じていたことが推測される。それだけに「私」には〈きぬ子の空罐〉がより痛ましいものを感じられてその〈心の痛み〉に堪えられず、「私」は〈きぬ子の空罐〉、さらには〈在学中〉のきぬ子のことまで忘れたが、それでも記憶の痕跡が〈きぬ子の空罐〉事件から当事者を捨象した〈少女〉の〈空罐事件〉として残っていたのだと考えられる。「私」ときぬ子の違いは、T先生の最期を目にしたきぬ子の方が精神的な外傷が深く、忘れようとしても忘れられなかったのに対して〈空罐事件〉を目にした「私」はきぬ子よりは

精神的な外傷が浅く、〈在学中〉のきぬ子のことを忘れることができいたということである。しかし「私」も〈教室〉という場所と大木の言葉から〈きぬ子の空罐〉事件のことをまざまざと思い出す。それは「私」の中にもきぬ子のように忘却や記憶の曖昧化では完全に消し去ることができない外傷記憶があったことを示しているのである。

これまで深津謙一郎が〈きぬ子に焦点化する形で示される「入れ子」の挿話〉と指摘し⁽⁴⁹⁾、川口隆行が〈「ガラス片」のイメージを介して、T先生の消滅する光景を目撃して心の負担を抱えたきぬ子、空罐少女を目撃した心の痛みが残る続ける「私」、といった入れ子の構造になっている〉と指摘してきた⁽⁵⁰⁾。空罐の入れ子構造に場所の要素を加えて整理すると左図のようになる。



この入れ子構造によって浮かび上がるのは、きぬ子がT先生の最期を忘れようとするのを「私」が忘れない一方で、きぬ子が父母

のことを忘れまいとするのを「私」が忘れていたということである。小説「空罐」は〈中庭〉、〈講堂〉、〈K寺〉、〈教室〉をそれぞれ「共有できる記憶」、「共有できない記憶」、「忘れようとしても忘れられない記憶」、「忘れようとして忘れていた記憶」を浮かび上がらせる場所として描き分けることによって、単なる被爆体験の有無だけでなく、被爆者がそれぞれに被爆後の時間を生きるために何かを忘れようとし、あるいは忘れまいとすることによって原爆についてさまざまな記憶の分断が生まれることを描いているのである。

ただし、この小説は被爆者と非被爆者、さらに被爆者どうしでも結局のところ記憶はばらばらになるしかなく、きぬ子が忘却に失敗し、「私」も不完全な形でしか忘却できなかったように被爆者たちには生きるために必要なことだけを記憶しようとしてもそれが許されないという否定的なことばかりを描いているのではない。(きぬ子の空罐)の記憶を取り戻した「私」は次のように語るのである。

焼けた家の跡に立って、白い灰の底から父と母の骨を拾う、幼いきぬ子の、うつむいた姿が、薄暗い教室の中に浮かびあがった。

「私」が〈三十年前〉にこのようなきぬ子の姿を実際に見たはずはない。ここで「私」は見たのではなく想像した光景について語っているのである。それは〈薄暗い教室〉つまり物語の現在において「私」たち〈五人〉がいる〈教室〉に〈浮かびあがっ〉ている。このとき「私」は事件当時はあまりに痛々しくて想像できなかった(あるいは想像できていてもその後忘れていた)〈父と母の骨

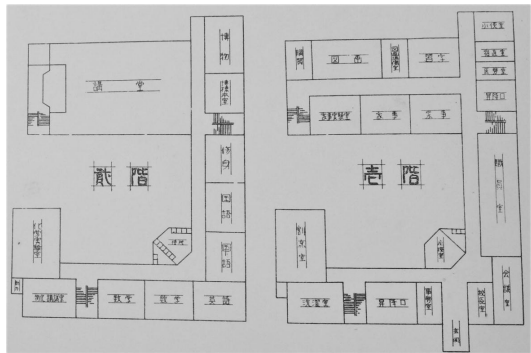
を拾う、幼いきぬ子の、うつむいた姿)を〈三十年〉という時間、〈焼け

た家の跡〉と〈薄暗い教室〉という空間を超えてありありと思ひ浮かべることができている。(三十年)という長い時間を経て、ようやく「私」はきぬ子の抱えている〈痛み〉に向き合い、思いをはせることができるようになったのである。「私」は〈あの空罐は、いま何処にあるのだろう〉、(き

ぬ子は、まだ、赤さびた空罐に両親の骨を入れて、独り住まいの部屋の机に、置いているのだろうか)と問いを抱くが、それらは「私」がきぬ子の〈痛み〉を想像できるようになったときにはじめて生まれたものである。そのような「私」の変化を描いて小説は結ばれている。

きぬ子は、あした入院するという。きぬ子の背中から、三十年前のガラス片は、何個でてくるだろう。光の中に取り出された白い脂肪のぬめった珠は、どんな光を放つのだろうか。

小説の末尾で「私」はきぬ子について次々に問いを発する。それは「私」がきぬ子の内面をもっと知りたいと思っ



校舎平面図(写真帳『新築記念県立長崎高等女学校』)

れである。この思いは大木に（被爆は、せん方がよかに決まってるやかね）と言われて、西田が（いい、わるいじゃなくって、心情的にそうありたい）と答えたときの、記憶の分断を越えて何かを共感したいという思いに近い。先述の通り（ガラス片）とそれを包む（脂肪）が体内異物に対する身体的な反応だけでなく、外傷記憶に対する精神的な反応をも表しているのだと考えれば、（ガラス片は、何個でてくるだろう）、（どんな光を放つのだろうか）とは、きぬ子が負っている心の傷がどのようなものであり、彼女はそれによろしく向き合ってきたのかを問うていることになる。これらの問いは具体的には（あの空罐は、いま何処にあるのだろうか）、（きぬ子は、まだ、赤さびた空罐に両親の骨を入れて、独り住まいの部屋の机に、置いているのだろうか）という問いと密接に結びつくものである。

きぬ子はいつか（空罐）について語ってくれるかもしれないが、（昨年、K寺で逢ったとき）にも（両親の話には触れ）ず、（現在の生活も、過去の生活も、いつさいを口にしなかった）ことを考えれば、これからも何も語ってくれないかもしれない。「私」も遠慮してきぬ子に何も尋ねないかもしれない。それでも二人の交流が完全に閉ざされているのではない。きぬ子がT先生の最期については語り、両親については語らないことが示すのは、人間には時が経っても消えない（痛み）があり、それはときに語りえないものになるということであったが、たとえその（痛み）の内実が分からなくても相手がそれに堪えて生きていることを知り、その内面を推し量ること自体が（あした）という新しい時間をつむぐ一つの交流なのである。（三十年前のガラス片）を（白い脂

肪のぬめった珠」と捉えなおす「私」の言葉は、ときに沈黙しながら（痛み）に堪えつづけてきたであろうきぬ子の生き方を尊重すること、沈黙を前にして考えるのをやめるのではなく、空白に向けて想像しつづけることの重要性を示しているのである。

そもそも原爆を伝える十全な表象など存在しない。何を見、聞き、知ってもその先には沈黙があり、空白が広がっている。私たちが触れることができるのは常にその痕跡でしかない。しかし、たとえ十全なものでもなくとも痕跡はまったく無力な力でもない。痕跡はときにその起源に迫る何かを伝え、想像させる力を持っている。きぬ子たちの言葉や（校舎）という場所が「私」にさまざまなことを想起させ、想像させたように。「空罐」という小説が今はなき人々や場所のことを読者に伝え、想像させるように。（きぬ子の空罐）は（罐）の側面で視線を遮る一方でその中にある（空）白（それはきぬ子の内面の隠^{カクレ}喻にもなっている）への想像を促す。「空罐」は原爆が生み出す記憶の分断や空白だけでなく、言葉や場所という痕跡が喚起する想像力の可能性を描いた小説なのである。

おわりに——林京子「空罐」と野坂昭如「火垂るの墓」

最後に林京子「空罐」の（ナシヨナルな欲望）に回収されない側面について考えたい。森敦が（少女がカンカラ罐に入れて骨を持ってきてやっている）といった（小説はいっぱい）あるが（何ともないとともに、この小説の妙味がある）と指摘し⁽⁴⁾、島村輝が（焼けただれて蓋も失った空罐の中に被爆死した両親の骨を入

れて持ち歩いていたきぬ子という少女の印象が強烈で、あり、(野坂昭如さんの「火垂るの墓」を読んだ時と同じような、ある一つの出来事に対して、極めて強烈な印象を持たせる作品)であると指摘する通り⁽⁵²⁾、「空罐」の他にも家族の遺骨を持ち歩いているという物語はあり、その代表として挙げられるのは(中学三年)の清太が(四歳)の妹、節子の遺骨を(ドロップの缶)に入れて持ち歩いているという野坂昭如「火垂るの墓」(「オール讀物」一九六七・一〇)とそれを原作とするアニメーション、高畑勲監督『火垂るの墓』(一九八八年公開)であろう。越前谷宏は「火垂るの墓」について(原作にはノイズが散在しているし、今様西鶴ともいわれる饒舌な文体そのものが(感傷)にブレイキをかけてもいる)が、特にアニメーションは(原作にあつたノイズを丁寧に除去することによって、純粹な(悲劇)に仕立て上げてしまった)結果、「孤児」や(継子譚)という(悲しい物語)が戦争に結びついた(銃後の・女性の(子ども)・被害の)物語として受容される傾向が強くなっていると論じている⁽⁵³⁾。「空罐」を含む「ギヤマンビードロ」についても中上健次が(「お父さん、こんなに犠牲になりました」と娘が訴えたいところを歯をくいしばって耐えている)さまを描くことで(人は被害者の小説だから身につまされ、甘い涙を流す)、(戦争や悪をやった親が口をぬぐったまま甘い後悔にひたるには丁度いい小説)になっていると批判している⁽⁵⁴⁾。確かに(高女の生徒たち)の被爆体験を描いた「空罐」も越前谷が指摘する(銃後の・女性の(子ども)・被害の)側面を強調する物語として受容される可能性は十分にある。

しかし「空罐」は単に被爆者の被害だけを描いた小説ではない。

確かに解体寸前の元(高女)の(校舎)を主な舞台とするこの小説は、かつて「私」たちは(兵器工場に動員された)という間接的かつ消極的な形でしか「戦争加害」を描いていないと言えるが、「私」が級友としてのきぬ子のことを忘れていた、あえて極端な言い方をすれば記憶を抹殺していたという形で「戦後加害」を描いているのである(きぬ子は「私」に忘れられていたことを知っても平気だろうか)。これは「私」だけでなく「戦後」(敗戦後もさまざまな戦争に関わってきたことを覆い隠すこの言葉にも問題がある)という時間において戦争をどのように記憶し、忘却するかという集団的な記憶にも関わる問題である。本論の冒頭で触れた通り、川口隆行は一九七〇年代には「原爆文学」の正典化が行われ、原爆の記憶が(トラウマ記憶)から(物語記憶)へと(変換)されたことを指摘した。それは「原爆乙女」の矢須子という感傷的な像を記憶し、「怒れる大田洋子」という強迫的な像を忘却することでもあった。一九七〇年代は「空罐」が描く「戦後三十年」に重なる。その(三十年)の間に(在学中)の(きぬ子)という被爆者のことを忘れていた「私」という被爆者を描くことによって、この小説は一九七〇年代における原爆の記憶の(変換)をより強調した形で示しているのである。

その一方で、この小説は(三十年)経ってもT先生の最期を忘れられず、両親については何も語らないきぬ子を描くことによって、原爆の記憶の(変換)ができない被爆者も確かに存在することを示している。このように「空罐」は原爆の記憶を(トラウマ記憶)から(物語記憶)へと(変換)できないきぬ子の(傷)の深さを描き、(変換)していた「私」の「戦後加害」を描き、(き

ぬ子の空罐」のことを思い出してその内面に思いをはせることができるようになる。「私」の変化を描くことによって、(無垢な戦争被害者といった自己表象)を記憶して(加害者としての過去を忘却する)という(ナショナルな欲望)には回収されない強度を持ちえているのである。T先生の最期を忘れようとするきぬ子にも(在学中)のきぬ子を忘れていた「私」にもそうせずには「戦後三十年」を生きられなかったという内的な必然性があった。ひるがえって「戦後七五年」を生きる私たちはどのような(トラウマ)を抱えているのだろうか。深刻な(トラウマ)もないのに情性的かつ感傷的に(銃後の・女性の(子ども)・被害の)物語を求めつづけているのだとすれば、私たちはより深く(ナショナルな欲望)にとらわれつづけていることになる。「空罐」の(ナショナルな欲望)に回収されない側面の価値は、そのような私たちの姿を省みるときにより鮮明に浮かび上がるのである。

注

- 1 たとえば、アライダ・アスマン『想起の文化——忘却から対話へ』(安川晴基訳、岩波書店、二〇一九・一)第六章によれば(住民の経験記憶にまだ深く根づいているトラウマ的な歴史は、ミュージアム、教科書、追悼記念文化において同様に国民的ナラティブとして表象され、住民に強く支持される)と指摘されている。
- 2 川口隆行「原爆文学」という問題領域」(「Problematique」(文学／教育)二〇〇一・七)。引用は『原爆文学とどう問題領域』増補版』(創言社、二〇一一・五)による。
- 3 川口隆行「国文学領域から(一) 林京子「空き缶」の教材研究

——原爆文学をどう教えるか——」(中等教育における教科教育内容に関する研究(広島大学)二〇〇九・三)。

- 4 阿武泉『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 1300』(日外アソシエーツ、二〇〇八・四)および『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』(日外アソシエーツ、二〇〇八・一二)にもとづいて国語教科書における原民喜「夏の花」・井伏鱒二「黒い雨」・峠三吉「仮纏帯所にて」・林京子「空缶」ほかの掲載の変遷をまとめると次の通りになる。

- 原民喜「夏の花」**：【中学校】光村図書「国語三」(一九八四)・「国語3」(一九八七)・「国語3」(一九九〇)／【高等学校】三省堂「新版 現代国語3」(一九七五)・「新版 現代国語 改訂版3」(一九七八)・「新国語3」(一九八一)・「新版 現代国語 三訂版3」(一九八一)・「新国語2」(一九八三)・「新国語2 改訂版」(一九八六)・「新国語2 三訂版」(一九八九)・「新国語2 四訂版」(一九九二)／尚学図書「高等学校現代国語三」(一九七八)・「高等学校現代国語三 新訂版」(一九八一)・「高等学校国語二」(一九八三)・「高等学校国語二 新訂版」(一九八六)・「国語二 新版」(一九九二)・「新選現代文 改訂版」(一九九九)／第一学習社「高等学校現代国語2」(一九七八)・「高等学校 改訂 現代国語2」(一九八〇)・「高等学校新現代文」(一九九六)・「高等学校 改訂版 新現代文」(二〇〇〇)・「高等学校現代文」(二〇〇四)・「高等学校標準現代文」(二〇〇四)／東京書籍「新編 国語1」(一九九四)・「新編国語1」(一九九八)・「国語総合現代文編」(二〇〇七)
- 井伏鱒二「黒い雨」**：【中学校】学校図書「中学校国語三」(一九七五)・「中学校国語三」(一九七八)・「中学校国語三」(一九八

(一)・「中学校国語 三」(一九八四)・「中学校国語 三」(一九八七)
 ・「中学校国語 3」(一九九〇)・「中学校国語 3」(一九九三)・「中
 学校国語 3」(一九九七)・「中学校国語 3」(二〇〇二)・「中学校
 国語 3」(二〇〇六)／【高等学校】三省堂「高等学校国語 1」(一
 九八五)・「高等学校国語 1 改訂版」(一九八八)・「高等学校国語
 1 三訂版」(一九九一)／尚学図書「現代文」(一九九〇)・「現
 代文 改訂版」(一九九三)・「新版 現代文」(一九九六)／第一学
 習社「高等学校現代文(二訂版)」(一九八六)・「高等学校現代文
 (三訂版)」(一九八九)・「高等学校現代文(四訂版)」(一九九二)
 ・「高等学校現代文 2」(一九九六)・「高等学校 改訂版 現代文 2」
 (二〇〇〇)／筑摩書房「現代国語 1」(一九七三)・「現代国語
 1 改訂版」(一九七六)・「現代国語 1 二訂版」(一九七九)・「高
 等学校用国語 1」(一九八二)・「高等学校用国語 1 改訂版」(一
 九八五)・「高等学校用国語 1 二訂版」(一九八八)・「国語 1」(一
 九九四)・「国語 1 改訂版」(一九九八)／東京書籍「現代国語 1」
 (一九七三)・「新訂 現代国語 1」(一九七六)・「改訂現代国語 1」
 (一九七九)・「新選国語 1」(一九八五)・「新編 国語 1」(一九
 八八)・「新編 国語 1」(新訂版)」(一九九一)・「国語 1 (現代文
 編)」(一九九八)・「国語総合現代文編」(二〇〇三)

峠三吉「仮纏帯所にて」：【中学校】三省堂「中学校現代の国語 3
 新版」(一九七八)・「現代の国語 中学 3」(一九八一)・「現代の
 国語 中学 3 改訂版」(一九八四)・「現代の国語 3」(一九八七)
 ・「現代の国語 新訂版 3」(一九九〇)・「現代の国語 3」(一九九
 三)・「現代の国語 3」(一九九七)・「現代の国語 3」(二〇〇二)

／【高等学校】秀英出版「近代の詩歌 評論」(一九五七)

林京子「空罐」：【中学校】なし／【高等学校】教育出版「国語 1」
 (一九九四)・「国語 1 改訂版」(一九九八)・「現代文」(二〇〇
 四)／三省堂「新編 現代文」(一九九六)／第一学習社「高等学
 校 改訂版 国語 1」(一九九八)・「高等学校国語総合」(二〇〇三)

林京子「友よ」：【中学校】教育出版「中学国語 2」(一九八一)・「改
 訂 中学国語 2」(一九八四)・「新訂 中学国語 2」(一九八七)／
 【高等学校】旺文社「高等学校国語 1」(一九九四)・「高等学校
 国語 1 (改訂版)」(一九九八)

林京子「ギヤマン ビードロ」：【中学校】なし／【高等学校】尚
 学図書「新選国語 1」(一九九四)・「新選国語 1 改訂版」(一九
 九八)／第一学習社「高等学校国語 1」(一九八二)・「高等学校
 国語 1 (二訂版)」(一九八五)・「高等学校国語 1 (三訂版)」(一
 九八八)・「高等学校国語 1 (四訂版)」(一九九一)・「高等学校国
 語 1」(一九九四)

林京子「祭りの場」：【中学校】なし／【高等学校】角川書店「高
 等学校国語 1」(一九九四)・「高校生の国語 1」(一九九八)

5 教科書に掲載される際、「空罐」という題名は「空缶」もしくは「空
 き缶」とされているが、本論では初出・初版の表記を尊重して「空
 罐」としている。

6 二〇二〇年度に林京子「空罐」を掲載しているのは三省堂「精選
 国語総合 改訂版」、教育出版「現代文 A」、筑摩書房「国語総合 改
 訂版」、第一学習社「改訂版 新訂国語総合 現代文編」・「改訂版 国
 語総合」の五種類である。

7 初出の題名は「ギヤマン ビードロ 1 空罐」と記されている。
 本論における「空罐」からの引用は『林京子全集 第一巻』(日本

図書センター、二〇〇五・六)による。

- 8 『ギヤマン ビードロ』(講談社、一九七八・五)。収録作品は「空罐」「金毘羅山」「ギヤマン ビードロ」「青年たち」「黄砂」「響」「帰る」「記録」「友よ」「影」「無明」「野に」である。
- 9 橋中雄二「解説 研がれる人間」(『林京子全集 第一巻』前掲)。
- 10 林京子「孤独ということ」(『自然を恋う』中央公論社、一九八一・八)。
- 11 林京子「人は世につれ 世は歌につれ」(『波』一九八九・二)のち『瞬間の記憶』新日本出版社、一九九二・八)。
- 12 野坂昭雄「林京子「長い時間をかけた人間の経験」論」(『原爆文学研究』二〇〇八・一二)。
- 13 二〇二〇年度に井伏鱒二「黒い雨」を掲載しているのは学校図書「中学校 国語3」だけであり、原民喜「夏の花」を掲載しているのは三省堂「高等学校 現代文B 改訂版」だけである。
- 14 二〇二〇年度に林京子「友よ」を掲載しているのは大修館書店「国語総合 改訂版 現代文編」・「精選 国語総合 新訂版」の二種類である。
- 15 指導資料は基本的に教科書を採択した学校にしか販売されておらず、入手困難である。本論を書くにあたって参照できた教科書の指導資料は次の通り。教育出版「国語I 教授資料 現代文編」(一九九四)、三省堂「新編 現代文 指導資料」(一九九六)、第一学習社「改訂版 国語I 指導と研究」(一九九八)、筑摩書房「国語総合 学習指導の研究」(二〇一三)、三省堂「精選 国語総合 改訂版 指導書」(二〇一七)、第一学習社「改訂版 新訂 国語総合 現代文編 指導と研究」(*二〇一八)、教育出版「現代文A 教授資料」(*二〇一八)。
- 16 高木信「林京子「空罐」の(亡霊)的時空、あるいは記憶の感染の(不)可能性——教室のなかのテクスト論・2——」(『可能性としてのリテラシー教育——21世紀の(国語)授業にむけて——』ひつじ書房、二〇一・一〇)。
- 17 初出は「群像」一九九〇年二月。初版は『やすらかに今はねむり給え』(講談社、一九九〇年五月)。
- 18 林京子「便り——著者から読者へ」(『やすらかに今はねむり給え』・道』講談社文芸文庫、一九九三・七)。
- 19 松本常彦「空缶」(『改訂版 国語I 指導と研究』第一学習社、一九九八・三)。
- 20 林京子「自作再見——『ギヤマン ビードロ』」(『朝日新聞』一九九〇・八・五)
- 21 アライダ・アスマン『想起の空間 文化的記憶の形態と変遷』(安川晴基訳、水声社、二〇〇七・一二) 第二部第五章第八項。
- 22 高野光男「空缶」(『精選 国語総合 改訂版 指導書』三省堂、二〇一七・三)。
- 23 平田みち子「原爆体験記」(『被爆体験記』あの日、あの時) 旧長崎県立長崎高等学校42回生、一九九〇・八)。
- 24 吉富新一「県立長崎高女の原爆被災状況」(『長崎県立長崎高等学校創立百年記念誌 たちばなの歩み一〇〇年』橘同窓会、二〇〇〇・一〇)。
- 25 木下順二・高橋英夫・三木卓「創作合評 27 “未精算の過去”について」(『群像』一九七八・三)。

- 26 村上陽子「体験を分有する試み——林京子『ギヤマン ビードロ』論——」（『日本近代文学』二〇一・一一）。
- 27 村上陽子「体験を分有する試み」（前掲）。
- 28 高野光男「空缶」（前掲）。
- 29 「ナガサキノート 増山曉子さん 美しい顔のまま記憶に」（『朝日新聞（長崎県版）』二〇一八・一一・二〇）。
- 30 「ナガサキノート 増山曉子さん 9 嫁入り道具、残したまま」（『朝日新聞（長崎県版）』二〇一八・一一・二八）。
- 31 たとえば「道」（『文学界』一九七六・六。のち『道』文藝春秋、一九八五・五）では〈E寺〉の〈T先生〉、『やすらかに今はねむり給え』（前掲）では単に〈寺〉の〈南先生〉として描かれている。
- 32 中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』（岩波書店、二〇〇七・七）。
- 33 深津謙一郎「記憶を分有すること——林京子と文学の領分」（『千年紀文学』二〇〇五・七）。
- 34 深津謙一郎「八月九日」の〈亡霊〉——林京子『ギヤマン ビードロ』論（『共立女子大学文学部紀要』二〇一一・一）。
- 35 川口隆行「原爆——林京子「空缶」（石川巧・川口隆行編『戦争を（読む）ひつじ書房、二〇一三・三）。
- 36 ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち——負債状況Ⅱ国家、喪の作業、新しいインターナショナル』（増田一夫訳、藤原書店、二〇〇七・九）第四章。
- 37 高野光男「空缶」（前掲）。
- 38 伊達木信子「原爆体験記」（『被爆体験記くあの日、あの時く』前掲）には〈父の遺体は、伊良林小学校の校庭で材木を積み上げて焼
- き、骨は、漬物用の壺をきれいに洗って、その中に納めました」とある。
- 39 柳郷弘子「夏の太陽」（『被爆体験記くあの日、あの時く』前掲）には〈防空壕に入れていた大きな花瓶にお骨を納める。還暦祝いにと短歌の会員の方が下さった有田焼の花瓶に入った父は、母の背に負われて又、山を越えた〉とある。
- 40 横田房子「思い出の原爆体験記」（『被爆体験記くあの日、あの時く』前掲）には〈自宅の土地を掘り起こすと、お骨になって次々と母さん、弟、叔父が出て来ました。「さぞくるしく暑かったでしょうね。」と一つ一つ手で骨を拾って用意してた紙箱に収めながら、思いは数時間前に会った肉親の変わり果てた姿に汗と涙でぐしょぐしょになりました〉とある。
- 41 たとえば、犬童ともよ「あの日」の記録」（『被爆体験記くあの日、あの時く』前掲）の〈辻々には四斗樽に山盛り入ったお骨がありました〉という証言、吉岡孝二「お父さまの死」（『長崎精機原子爆弾記 一九四五—八・九』三菱重工株式会社長崎精機製作所、一九四九・八）の〈原爆の犠牲者の殆どは遺骨を拾ってくれる人もなく、又肉親の人が探しに行っても、どれが誰の骨だか、又何処にそれがあのか判らないと云う悲しい有様だったので〉という証言、中村順「どん底からの証言と告発」（『長崎の証言 第9集』一九七七・七）の〈母の遺体が見つかったのはたしか三日か四日あどただつたんです。一番上の姉が台所あたりで見つけた。まっ黒こげになって、誰の遺体かよくわからん。きつと母のものと思って、崇徳寺の横手の赤寺のお堂に納めました〉という証言などは原爆死没者の遺骨が誰のものであるかが分からない状況が多くあったことを伝え

ている。

- 42 林京子の他作品でも〈赤い糸〉は人間どうしのつながりを示すものとして描かれている。「はなのなかの道」(『海』一九七九・五。のち『ミシエルの口紅』中央公論社、一九八〇・二)では〈千人針を仕上げるには、文字通り千人の手がいる。千人の女性が武運を祈願して、赤い糸の結び目を一針ずつ縫いつけていくのである〉と出征者とのつながりが、「闇に高張り提灯が揺れて」(『ドッグウッドの花咲く町』影書房、一九八九・五)では〈第十二次中国残留日本人孤児の、肉親探しのテレビ番組をみました。(略)ある孤児は、ズボンの上から内股のあたりをさして、小さい傷があることを示す。傷は、別れるときに母親がつけたもののように、木綿針で、赤い糸が肌に縫いつけてあったといえます〉と生き別れた親子のつながりが、「それは、それは」(『群像』一九九二・九。のち『おさきに』講談社、一九九六・一〇)には〈縫い物が好きだった母親の、使い残した赤い糸の切れ端でもいい。いつかどこかで紛れ込んだ、生活の破片が出てこないだろうか。無性に、母親の呼吸が感じられる手応えが、わたしは欲しかった〉と亡き母とのつながりが〈赤い糸〉によって示されている。
- 43 きぬ子、西田、大木は〈弁論大会〉で〈おのおのクラス代表に選出され〉ているので別のクラスにいたことになる。
- 44 物語の現在は「私」たちが被爆してから〈三十年〉後、〈四十歳を過ぎ〉たときのことである。一九三〇年八月二八日生まれの林京子は一五歳になる直前に被爆しており、小説の「私」たちの年齢設定もそれに従っていると考えるここでは十代半ばとして論じている。
- 45 本文中に〈昨年、十年ぶりに私はきぬ子に逢った〉とあることか

ら十一年前としている。

- 46 森敦・川村二郎・田久保英夫「創作合評16 血縁と神話」(『群像』一九七七・四)。
- 47 川口隆行「原爆——林京子「空罐」」(前掲)。
- 48 佐佐木幸綱「林京子〈ギヤマン ビードロ〉鎮めきれない〈過去〉」(『文学界』一九七八・八)。
- 49 深津謙一郎「記憶を分有すること」(前掲)。
- 50 川口隆行「原爆——林京子「空罐」」(前掲)。
- 51 森敦・川村二郎・田久保英夫「創作合評16 血縁と神話」(前掲)。
- 52 林京子・島村輝「被爆を生きて——作品と生涯を語る」(岩波書店、二〇一一・七)。
- 53 越前谷宏「野坂昭如「火垂るの墓」と高畑勲『火垂るの墓』」(『日本文学』二〇〇五・四)。
- 54 中上健次・津島佑子・三田誠広・高橋三千綱・高城修三「われらの文学的立場——世代論を超えて——」(『文学界』一九七八・一〇)。

付記

本論は第六〇回原爆文学研究会(二〇一九・一二・二一、於九州大学西新プラザ)での口頭発表をもとに、新たに論としてまとめられたものである。質疑を通じて示唆を与えてくださった方々に心より御礼を申し上げる。また長崎高等女学校に関係する資料を閲覧するにあたり、長崎県立長崎図書館郷土課のみなさまにお世話になった。あわせて御礼を申し上げます。